

# 「総合的な学習の時間」のカリキュラム・マネジメント を担う教員の養成に関する研究

—総合的学習の担当者の実態・意識調査を通して—

A Study of Teacher Development for Supporting the Curriculum  
Management of the Period for Integrated Studies Teachers

—Based on Survey on the Period for Integrated Studies Teachers—

加 藤 智

KATO Satoshi

キーワード：総合的な学習の時間、カリキュラム・マネジメント、実態・意識調査

## はじめに

総合的な学習の時間（以下、総合的学習とする）は、変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとして、1999年3月に告示された学習指導要領で創設された。そして、総合的学習の誕生によって、教員に求められる資質能力も大きく変わろうとしている。

総合的学習では、従前の教科学習とは異なり、目標や内容を各学校が定める。したがって、総合的学習を担当する教員には、子どもや地域の実態を踏まえ、カリキュラムを編成・実施・評価し、改善を図る「カリキュラム・マネジメント」<sup>1)</sup>のスキルが求められる。

しかしながら、こうしたスキルをすべての教員に身につけさせるためには、相当の条件整備が必要となる。とりわけ総合的学習については、学校や地域の実態を踏まえることが求められるが、こうした実態を十分に把握できていない着任したばかりの教員（初任者を含む）にとっては、総合的学習のカリキュラム・マネジメントに係る負担は一層大きいと考えられる。そのような教員の総合的学習のカリキュラム・マネジメントをサポートする立場の教員として、筆者は各学校の総合的学習の担当者が重要な役割を果たし得ると考えている。

総合的学習が誕生して15年が過ぎ、各学校では、着実に実践が積み重ねられている。しかし、筆者が静岡県浜松市の小中学校に対して行った質問紙調査（拙稿「総合的な学習の時間における小中連携・接続の実態と今後の課題」<sup>2)</sup>を参照されたい）では、総合的学習の担当者の多く（6割程度）は担当歴が1～3年であるという結果が明らかとなった。すなわち、現状においては、総合的学習の担当者が教員の総合的学習のカリキュラム・マネジメントをサポートすることは難しいと推察される。

そこで本稿は、このような状況にある総合的学習の担当者の実態および総合的学習に関する意識について、先述した筆者の調査研究において用いた質問紙調査の自由記述の内容から分析

し、今後、各学校で総合的学習のカリキュラム・マネジメントが行われるために必要な施策や各学校の条件整備のあり方などについて提言を加えることを目的とする。

## 1 質問紙調査の概要

本調査は、筆者の「総合的な学習の時間における小中連携・接続の実態と今後の課題」(前出)に関する調査研究のために実施したものである。2015年8月に浜松市内で行われた総合的学習に関する現職研修において、小中学校の総合的学習の担当者を対象に質問紙調査(集合調査法)にて行った。質問紙の回収率(参加率)は、小学校65.0%(65校/100校)、中学校59.2%(29校/49校)、合計63.1%(94校/149校)であった。

拙稿では、質問紙調査の結果の分析を通して、総合的学習において小中連携・接続を一層充実させ、児童生徒の学力を連続的・発展的に高めていくために解決すべき課題を明らかにした。一方で、紙幅の都合や分析に関する時間的な制約により、質問紙調査の自由記述について詳細に分析するには至らなかった。本稿では、主に自由記述の内容の分析を通して、総合的学習の担当者の実態および総合的学習に関する意識を明らかにする。

なお、浜松市を本調査の対象とした理由としては、人口約80万人の政令指定都市で100校を超える公立小中学校を有しており、都市部や山間部など多様な学校の実態に即した結果が得られること、筆者が3年以上現職研修の講師として関わっており、調査にあたって必要となる信頼関係を築いていること、さらに、同市が2011年度に各教科・領域の「小中一貫カリキュラム」を作成し、小中学校9年間の系統性を意識した指導に努めている一方で、開発したカリキュラムの見直しや改善についての課題が指摘されているように<sup>3)</sup>、全国の多くの学校が抱える課題を同様に抱えており、他地域でも応用可能な提案ができると予測されることが挙げられる。

## 2 質問紙調査の結果

### (1) 担当者が総合的学習に関して負担に感じる事柄

総合的学習の担当者が自身の職務について負担に感じているかを尋ねた結果が図である。

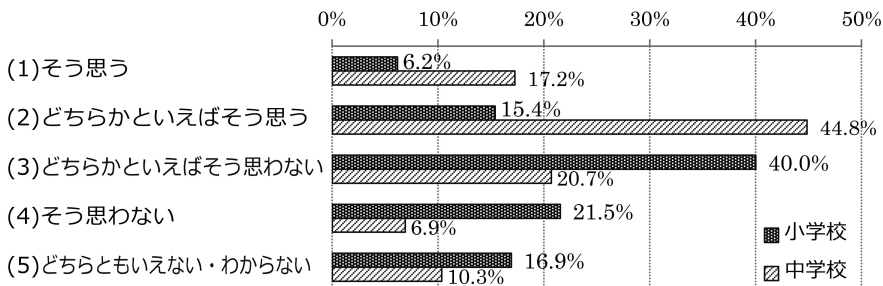


図 総合的学習の担当の職務を負担に感じるか

出典：加藤智(2016)「総合的な学習の時間における小中連携・接続の実態と今後の課題」日本生活科・総合的学習教育学会学会誌『せいかつか&そうごう』第23号

小学校では、「(3) どちらかといえばそう思わない」と「(4) そう思わない」を合わせると6割を超える。一方で、中学校では、「(1) そう思う」と「(2) どちらかといえばそう思う」を合わせると6割を超える結果となり、校種間で総合的な学習の担当者の負担感に大きな差があることが明らかとなった。

さらに、負担に感じている職務内容について自由記述で回答を得た。その結果を校種別に以下に示す。

「総合的な学習に関して負担に感じる事柄」に対する自由記述のコメント（小学校教員）

- (1) 子どもの気付きや疑問を大切に学習していきたいが、小学校では、様々な教科学習を行いながら進めていく時間がとれません。また、地域とのかかわりをもちたいのですが協力を得るのは難しく、手間もかかります。
- (2) 外部の人（ゲストティーチャー）との打ち合わせ・連携。
- (3) 総合では学校内だけでなく、学校外の方に教えていただくことも多いので大変だと思う。
- (3) いろんな人と連絡を取らなければならないので気を遣う。
- (4) 協力いただける人材・施設の発掘。理解をいただくこと。
- (5) 地域のつながりを大切にしないといけないため、学校としてはやめたいことも継続させないといけない。
- (6) 人材を見つけたり教師側が良く調べたりしてもっと子どもたちが学びたいと思える活動を作っていく必要があると思います。
- (7) 子どもの実態を捉えた意欲付けや意欲の持続は難しいと感じました。
- (8) 一人一人の課題が違うため、課題設定をうまく子どもたちのものにできない。
- (9) 1年を通したテーマの設定。
- (10) 単元計画、資料等の準備。
- (11) 準備の時間が多い。
- (12) 年間学習計画の見直し。
- (13) 学校独自の教材開発が主なので、充実した活動にしていくために、絶えず指導を見直していかなくてはならない。それを各学年の先生方へお願いすることが大変。教材のデータ化、次年度への引き継ぎのお願い等。
- (14) 勤務先が異動により変わりました。地域はもちろん学校内のことも分からないにもかかわらず総合の担当に。総合の1年を通しての見通しや自分の担当学年以外へのアドバイスができず、負担に感じています。

先の調査結果から、小学校教員の約2割が総合的な学習の担当者の職務に負担を感じていることが明らかとなっている。上のコメントの分析から、こうした負担感の実態を明らかにしたい。

(1)～(5)は、外部の人材との連携に関するコメントである。(4)からは、単に協力を得るだけでなく、学校の取り組みへの理解を得ることに担当者が苦労していることがうかがえる。また、(5)からは、自由なカリキュラムの編成と地域とのつながりの両立の難しさを担当者が感じていることがわかる。

(6)～(8)からは、児童が興味・関心を高める学習内容や学習対象の設定に苦慮していることがうかがわれる。これらは、授業担当者(学級担任)としての負担感も含んでいると考えられる。

(9)～(11)は、カリキュラムの編成やそのための準備に関するコメントである。多くの担当者が、1年間を見通したカリキュラムの編成に苦労していることがわかる。

(12)と(13)は、カリキュラムの見直しに関するコメントである。(13)からは、カリキュラムの見直しを授業担当者に依頼したり、その結果を次年度に引き継いだりといった職務に労力を費やす担当者の姿が見て取れる。

(14)は、人事異動に伴う負担感に関するコメントである。このコメントからは、異動して1年目であっても総合的学習の担当者となる事例があること、そして、そのような状況にある教員が、担当者としての役割を十分に果たせていないということに大きな負担感を抱いていることがうかがわれる。

「総合的学習に関して負担に感じる事柄」に対する自由記述のコメント(中学校教員)

- (1) 活動場所(福祉や職業体験)を新たに見つけるのに時間がかかり、新たに50～60か所の承諾を得るのに夏休み中5日間かかりました。また、地域を知る活動で地域のお年寄りとの交流では民生委員の協力を得て連絡をとりましたが、学校だけではうまく連絡をとれないときの協力者を見つけるまでが大変である。
- (2) 例えば職場体験をさせようとする、事前に職場の確保のために、かなりの数の電話連絡や打ち合わせが必要になります。それらを学年全体で行うにしてもコーディネートする仕事がちんとしていないと手伝ってもらえません。年間に何度かこのような学習を行うと、とても負担が大きいです。もちろん事後も発表やまとめなどたくさんあります。
- (3) 人材活用の交渉面など。
- (4) カリキュラムから考えるところ。
- (5) 年間のカリキュラムづくりやそれぞれの時間の準備に時間がかかる。
- (6) 単元計画・年間計画の作成。
- (7) これといったカリキュラムが確定されていない。
- (8) 既存の指導案、ワークシートがない中で、ゼロから授業を作っていくこと。
- (9) 負担というよりは、時数の少なさがネックとなり、やりたい活動になかなか取り組めない。
- (10) 専門的な知識もなく、ほかの教科と比べて全体としてのモチベーションが低いいため、取り組みが独りになってしまいがちだから。
- (11) 学校、学年、職員に具体的に何をさせたらよいか分からない。
- (12) 総合的な学習の有効性を理解している方が少なく、協力してもらいづらい。
- (13) 各担任との連携。
- (14) 準備に時間がかかる。外部の人材の発掘が難しい。
- (15) 充実した活動内容にするためには、相談や話し合いの場が必要であるが、なかなか時間の確保ができない現状。
- (16) 経験が浅いため、なかなか内容のある効果的な活動設定に苦労している。
- (17) 今やっていることでよいのか疑問。

既に述べたように、中学校では総合的学習の担当者の6割がその職務を負担に感じている。その内容をコメントから分析してみたい。

(1)～(3)は、外部の人材や機関との連携に関するコメントである。特に職場体験の受け入れ先の調整に苦労していることがわかる。(2)からは、総合的学習のねらいや学校としての取り組みを相手に理解してもらうことに苦労していることが読み取れる。

(4)～(9)は、カリキュラムの編成や授業づくりに関するコメントである。総合的学習は他教科等よりカリキュラム開発に多大な労力を要することが担当者の負担感となっていると推察される。そして、(9)は、限られた総合的学習の時間数の中で、充実したカリキュラムを編成することの難しさを指摘している。

(10)～(13)は、教員間の連携に関するコメントである。特に中学校においては、校内の教員への総合的学習の理解の促進や各担任との連携といった職務について、担当者が強く負担に感じていることがわかる。

(14)と(15)は、総合的学習の準備や計画等の時間の確保の難しさに関するコメントである。特に外部の人材や教員との打ち合わせに十分な時間を費やすことができていない現状が見て取れる。

(16)や(17)は、総合的学習についての経験や理解の不足から、総合的学習の進め方に不安や疑問を抱いている担当者のコメントであろう。先述の通り、総合的学習の担当者の多くが担当者としての経験年数の浅いことがその背景にあると考えられる。

## (2) 今後さらに総合的学習を充実させていくために必要だと思うこと

総合的学習の担当者が、各学校の総合的学習のさらなる充実・発展のために何が必要と考えているのか、自由記述で回答を得た。

「今後さらに総合的な学習の時間を充実させていくために必要なこと」に対する自由記述のコメント（小学校教員）

- (1) 人材の確保（地域の人、専門的な知識をもっている人）。
- (2) 教師間の連携は、もちろん大事だと思いますが、地域人材や場所の確保が充実した総合的時間につながるのかなと思います。
- (3) 地域と連携していくこと。
- (4) その学級独自の地域性を生かした取り組み。
- (5) 各学校での課題を明確にする。そのための調べる資料や施設、人材を充実させる。
- (6) 各学年の内容の見直し（中学校区との関わりを見て）。
- (7) 一つの教科がとび出ず、バランスよく指導する。
- (8) 現場の教員が子どもたちに付けさせたい力を認識し、子どもたちの実態をふまえて計画を立てること
- (9) 各学年の実施状況を把握する。年計の見直しや子どもの実態に合わせたカリキュラムの練り直しが必要。

- (10) 学校オリジナルのカリキュラムづくり。
- (11) 定着と同時にマンネリ化しているところがあるので、それをどうしていくかが課題だと思います。また、課題設定の際、子どもたちの個々の思いが活かせる場合は良いと思いますが、教師主導になりがちになる場合があるので、そこに気をつけなくてはいけないと思います。
- (12) 総合の授業をコーディネートする人は必要だと思う。現在、若く経験の少ない人が総合・生活科の主任になっていることが多く、学校のコーディネートはとても難しい。
- (13) コーディネーターが必要。各学級担任の「総合」への理解を深め、必要感を高めること。総合を通して、子どもたちにどんな力がつくのかを明らかにしていくこと。また、その成長を教師も子どもも実感していくこと。
- (14) 総合的な学習の時間の内容は学校によって違う。学校の特色を生かして内容を考えていくことが多いが、教師の柱がくずれてしまうことがある。総合の取り組みの様子と次年度につなぐように職員間の連携と共通理解を大切にしないといけないと思います。
- (15) 学級数が多い学校では同じ学年の先生の共通理解がとても大切に感じます。
- (16) 指導の仕方、教材開発の仕方、方法をもっと研修していくべきだと思います。教師の必要感をもつようにする。
- (17) 学校や子どもの実態に合った年間計画を立てる、教師の指導力。
- (18) 行事やその他の授業で学習内容が非常に多く、総合の時間にゆとりがない。
- (19) 校内外での研修時間の確保。
- (20) 様々な学校の実践にもっと触れる機会がほしい。
- (21) 様々な実践例を知り、自分の学級で何ができるか全教員がしっかりと考えること。
- (22) 時間の確保（教師間の共通理解、ゲストティーチャーとの打ち合わせなどをする時間がほしい）。
- (23) 総合的な学習の時間については、個人的にはあまり必要性を感じていないので、現在の内容・活動を継続していけばよいと思う。

(1)～(5)は、地域の人材の確保や地域との連携の充実に関するコメントである。また、(5)は地域の特色を生かした課題設定の重要性を指摘している。

(6)～(11)は、学校独自のカリキュラムの編成やこれまでのカリキュラムの見直しに関するコメントである。(6)は中学校とのカリキュラムの接続の必要性を、(7)はカリキュラム編成の際に多様な教科との関連的な指導の必要性を、そして(8)と(9)は、カリキュラム編成の際に育成すべき資質能力を意識する必要性を指摘している。また、(10)や(11)は、学校や教師が独自に、総合的学習の趣旨に沿ったカリキュラムを編成することの必要性を指摘している。

(12)～(17)は、校内体制の整備や教員の理解の促進に関するコメントである。(12)と(13)は総合的学習のコーディネーターの必要性を、(14)と(15)は教員の共通理解の必要性を、(16)と(17)はカリキュラム・マネジメント全般に関する教師の力量向上の必要性を訴えている。

(18) から (22) は、時間の確保に関するコメントである。(18) は、他教科等や行事などによって総合的な学習に十分な時間を割くことができている課題を解消する必要性を指摘している。(19) ～ (22) は、校内研修や他の学校の実践に触れる機会、打ち合わせ等に要する時間を確保することの重要性を指摘している。

(23) は少数意見ではあるが、総合的な学習の担当者であっても、総合的な学習の必要性を感じていないケースがあることを示している。

「今後さらに総合的な学習の時間を充実させていくために必要なこと」に対する自由記述のコメント（中学校教員）

- (1) 小中で連携して育てたい力、カリキュラムをつくっていく。小中と系統的な内容にする。
- (2) 中学校区で小中合同の研修会で内容や問題について話し合いをしたときに、調べ方、発表の仕方、内容について確認をした。地域によって実情が違うため、担当者だけでなく、各学年や担任の考え方を広く取り入れて話し合う場や時間の必要性を感じた。また一つ大きなカリキュラム（大まかな身に着ける力、方法）を学年ごとに作ってもらいたい。
- (3) 学習内容を固定するのではなく、生徒の実態や地域の状況の変化に敏感に対応していくべきであると感じる。
- (4) 学校全体での取り組み。
- (5) 教員間での意識的な共通理解。
- (6) 教員間での話し合いが必要だと思う。
- (7) 各担任との連携や意見交換、共通理解。
- (8) 学年全体での取り組み、特に中学の場合は、教職員全体の共通理解が欠かせないと思う。
- (9) 専門的知識のあるコーディネーター。
- (10) 学校と外（社会）とをつなぐ（＝コーディネート）する組織がほしい。できればすべての小中学校が利用できるような組織があるとよい。
- (11) 各学校で、校内研修の際、教員間で学習内容、及び、つけたい力を明確にすべきだと思う。教員一人一人の意識づけが何より重要だと考える。
- (12) 中学校では多忙感が強く、できるだけ面倒なことはしたくないという方が多い。このくらいだったらやってみてもいいかな、とまずは先生方をやる気にさせる単元計画とフォローをしていくことが必要だと思う。探究的な学習の指導を身に着けること。
- (13) 手間暇かける時間、人的な余裕が必要。
- (14) 一人の教師にかかる負担の軽減。
- (15) 学校内での仕事を減らし、多忙化をなくすなかで、じっくり取り組める職場環境を整える。
- (16) 人材バンク等、地域の力を有効に使えるような資源をつみ重ねていく。
- (17) 実践データで残していく。
- (18) 成果を出すこと。

(1) ～ (3) は、カリキュラムの編成に関するコメントである。(1) や (2) は、小学校とのカリキュラムの接続の必要性を、(3) は地域の実態に応じたカリキュラムの編成の必要性を指摘している。

(4)～(15)は、校内体制の整備や教員の理解の促進に関するコメントである。(4)～(8)は教員の共通理解の必要性を、(9)と(10)は総合的学習のコーディネーターの必要性を、(11)と(12)は研修などの教員のサポートの必要性を指摘している。また、(13)～(15)は教員の負担軽減の必要性を訴えている。

(16)～(18)は、各学校での総合的学習の資源や成果の積み重ねに関するコメントである。(16)と(17)は、これまでの総合的学習の実践の中で蓄積された記録や地域人材とのつながりを継承していくことの必要性を、(18)は、総合的学習の取り組みによる成果を教員や生徒が自覚したり、外部から評価されたりすることの必要性を指摘しているものと推察される。

### (3) 小中連携・接続の必要感

中学校教員の「今後さらに総合的な学習の時間を充実させていくために必要なこと」に対する自由記述のコメントには、小中学校間のカリキュラムの接続の必要性についての指摘がいくつか見られている。このような小中学校間の連携やカリキュラムの接続(小中連携・接続)に関する総合的学習の担当者の意識についても調査している。

総合的学習における小中連携・接続の必要性をどの程度の教員が感じているのかを問うた結果が、以下の表である。小中連携・接続の必要性については、小学校、中学校いずれの教員もそのほとんどが感じており、小学校の教員よりも中学校の教員の方が必要感をもっていることが明らかとなった。

表 小中連携・接続についての必要感

|              | 小学校 |       | 中学校 |       |
|--------------|-----|-------|-----|-------|
|              | 回答数 | 割合    | 回答数 | 割合    |
| とても感じる       | 21  | 32.3% | 12  | 41.4% |
| どちらかといえば感じる  | 37  | 56.9% | 15  | 51.7% |
| どちらかといえば感じない | 5   | 7.7%  | 1   | 3.4%  |
| 感じない         | 0   | 0%    | 0   | 0%    |
| わからない・無回答    | 2   | 3.1%  | 1   | 3.4%  |

出典：加藤智(2016)「総合的な学習の時間における小中連携・接続の実態と今後の課題」  
日本生活科・総合的学習教育学会会誌『せいかつか&そうごう』第23号

総合的学習における小中連携・接続に必要性を感じるかを問うた自由記述のコメントを以下に示す。



「総合的な学習における小中連携・接続に必要性を感じるか」に対する自由記述のコメント

（小学校教員）

【とても感じる・どちらかといえば感じる】

- (1) 小・中と内容が重複することがあったから。
- (2) 小中で同じテーマに取り組むことがあることをよく聞くから。
- (3) 小学校と中学校で内容が重複してしまうことやギャップがありすぎることもある。
- (4) 同じ中学校区の小学校がそれぞれどのような内容をやっているか知った上ではないと、カリキュラムを開発することが難しいと思う。
- (5) 総合的な学習の時間では地域のことも学習するので、小学校段階でどんなことを学習しているか中学校に伝えていく必要があると思う。
- (6) 内容の重複や難易度の逆転がないように。
- (7) 内容が重ならない、逆転現象のないカリキュラムづくりは必要だと思います。
- (8) 中学校の実践に学校間の差が大きいため内容が不十分なことがあると感じる。学びの質を上げる為に連携は必要かもしれない。
- (9) 指導の連続性ということを考えると必要なことだと思います。
- (10) 同じ中学校区内で目指す子供の姿は同じなので総合でも系統的な取り組みは必要。
- (11) 系統的な学びの中でこそ子どもたちの学びがより深まると考えるから。
- (12) 子どもたちの発達段階に合わせて、きちんと目指す力をつける必要があるから。
- (13) 4年かけて積み上げた力を生かすことが必要。中学校区なら地域の実態も似ていて、小学校で身に付けたことを生かせると思う。
- (14) 小学校での経験や学習が中学でどのように生かされ、成長につなげられるのかを意識することができる。
- (15) 小学校段階で課題の見付け方、表現の仕方を学び、中学校ではそれをさらに深めていけるように系統的に学習していきたい。
- (16) 内容だけでなく、学び方等の連携が必要。
- (17) 中学校の総合について話を聞くと、小中のつながりが薄く、もう少し交流したい。
- (18) 小学校でつけた力を中学校でさらに高めてほしいため、実態の共有をしたい。小中で子ども同士が交流することも増やしていきたい。
- (19) テーマやつけたい力が系統的であることは当然大切であるが、その前に、総合が重要な領域、価値のある領域として、認識されることが、より重要である。
- (20) 小学校の教員と中学校の教員では、総合に対する意識に大きな違いがあると思う。
- (21) 地域の人材や教材が共有できるとよい。

【どちらかといえば感じない、感じない、わからない・無回答】

- (22) 特別に総合だけが必要とは思わないので。
- (23) 生徒指導や教科の基礎定着が最優先であると考えているため。
- (24) 中学の先生から困っているという話を聞かない。
- (25) 内容的に重なっても問題ないから。
- (26) 小中それぞれの発達段階に合わせた内容を考え、活動を考えられればよいと思うので、あまり内容の調整等を行う必要はないと思う。
- (27) あまり系統性にこだわると、それぞれの内容や活動が制限される（中学でやるから取り上げない、とかその逆）ことがありそうなので、小中それぞれの必要性や独自性を尊重した方がよい。

小学校教員のコメントを分類すると、(1)～(8)は主に小中学校間の学習内容の重複を避けるために小中連携・接続を必要とするコメントである。(1)や(2)は、小学校教員が中学校の総合的学習の実践に触れる中で感じているコメントである。(5)は、特に総合的学習が地域を主な学習対象とする点から必要性を指摘しているが、(22)のように、総合的学習を特別視する必要はないとのコメントも見られる。また、(23)は、生徒指導上の課題の克服やいわゆる基礎学力の定着を小中学校間の優先事項とするコメントであり、この背景には、(24)にあるように、特に総合的学習において小中連携・接続が行われなくても、中学校側から小学校に問題として指摘されていないこと、小学校側にそうした声が届いていないことがありそうだ。

また、(6)や(7)のコメントから、小中学校での「逆転現象」、すなわち、中学校において小学校よりも質の低い総合的学習の実践が行われていると感じている教員も少なからずいることがうかがわれる。一方で、(25)～(27)のように、内容的に重複することは問題ないというコメントや、各学校の独自性を重視すべきというコメントもあった。

(9)～(16)は、主に指導や学力育成のために系統性を必要とするコメントである。(13)～(15)のコメントは、小学校の総合的学習で育成した資質能力を中学校につなげ、さらに伸ばさせる必要性を指摘している。また、(16)は、資質能力はもとより、学習形態の連携の必要性を指摘するものである。

(17)と(18)は、小中学校間の交流を必要とするコメントである。中学校の総合的学習の取り組みや、中学生が小学校の総合的学習で身につけた資質能力をどのように発揮しているのかを小学校側が理解することの重要性を指摘している。

(19)と(20)は、総合的学習に対する小中学校の教員の意識を高めることを必要とするコメントである。特に小学校側の担当者が、中学校の教員の総合的学習に対する意識の低さを感じ取っていることがうかがわれる。

(21)は、小中学校で地域の優れた人材や教材を共有するために必要とするコメントである。小中学校で協同して人材を見つけたり教材を開発したりすることで、よりよい総合的学習の実践が行われる可能性を指摘している。

「総合的学習における小中連携・接続に必要性を感じるか」に対する自由記述のコメント  
(中学校教員)

【とても感じる・どちらかといえば感じる】

- (1) 中学校で行っている活動が小学校での活動と重なっている。
- (2) 地域の小学校と同じ内容をやっているという話を生徒から聞き中学が深まりのある内容を行っているかと不安。
- (3) 小学校で何を行っているかを知らないから。内容がかぶっていることもあり、二度同じことをやっていたりする。
- (4) 子どもたちがどのような学習を経験してきたかを知ること、どんな学習を計画していけばよいか分かるから。

- (5) 中学校で内容を考えてとき、小学校で何をどの程度に学習したかを知る必要がある。
  - (6) 中学校になったからには小学校の実践、学習を踏まえて、よりレベルアップした学習を展開したい。
  - (7) 小中連携はどの教科でも必要なことがとは思いますが、総合が特に必要だと考える。例えば福祉の車椅子、アイマスク体験など、小学校で体験したときの感じ方と中学校で感じた時の感じ方では発達段階によって違うという方もいるが、福祉は障害だけではないと思うので、中学校ではもっと違うことに取り組みせたい。そのためには小学校でどんなことを学習してきたのかを把握すること、系統性を持たせることは大切だと思う。
  - (8) 小学校でやっている内容がわからないため、中学校でも同じことをやるが多く、生徒が興味を感じない。
  - (9) 小学校でやったことと同じことを中学校でやる形になるのでは生徒の意欲が上がらない。
  - (10) 育てたい力を学区で継続して育むため。
  - (11) 同じような内容を扱っているのでその系統性や指導目標について共通理解を図りたい。
  - (12) 特に教員間での把握が必要だと感じる。どのようなことを学んできているのか。そこを理解した上で、系統的な学びになるよう、カリキュラムを組むべきだと思う。
  - (13) 9年間を見通して育てたい力を考えたうえで、カリキュラムを組む必要があると思うから。
  - (14) キャリア教育という形において総合の時間が有効であり、そのために9年間を見通したカリキュラムが作られるべきだと思うから。
  - (15) 発信、発表の仕方について新聞、レポート、パワーポイントなどあるのが、系統的に発達段階や他教科の内容も含めて、計画があると助かる。
  - (16) 小から中へ内容に系統性を持たせることで、子供たちの取り組みや交流の力をつけさせることができると思うので。
  - (17) 教員の情報交換が必要だが、生徒や児童の交流も意味があると考えます。
  - (18) 総合的な学習の時間は学校の教科の力のみならず、地域の方々の力をお借りする必要がある。そのため、中学校区などで力をお借りできる方々のネットワークやデータベースづくりを行っていくことにより、スムーズに人材活用がなされるとともに、小中の子どもたちの様子を理解した上で指導していただけたらと思う。
  - (19) 多忙な中で、時間、場などの設定が難しい。
  - (20) 時間的な制約がある中では授業参観や打ち合わせをすることで、さらに内容の濃い活動に発展させられると思う。
  - (21) 総合を行うために準備やまとめにかなりの時間を必要としますが、そのために自分の担当教科の時間に影響が出る時があります。これが大変。
  - (22) 現状から、総合のために時間確保は難しいが、子どもたちの活動をつなげていくのは必要。資料とファイルに積み上げていくなどできることはしっかりやりたい。
- 【どちらかといえば感じない、感じない、わからない・無回答】**
- (23) 不要だとは言わないが、生徒指導上の課題や防災教育、外国語活動における連絡などがあり、その中では残念ながら最優先事項にならない。

今回の調査では、既に述べているように、小学校教員よりも中学校教員の方が総合的な学習における小中連携・接続について高い必要感を示している。その背景をコメントから分析してみたい。

(1)～(9)は、小学校調査と同様に、学習内容の重複を避けるために必要というコメントである。(1)や(2)のように、実際に内容の重複を実感している教員や、(3)のように小学校の内容を知らない教員が少なくないことがうかがわれる。(4)～(7)は、中学校の総合的学習のカリキュラムを考える上で、小学校の内容を知る必要があるとする声である。(8)や(9)からは、生徒の興味を呼び起こしたりや学習意欲を高めたりする上で、中学校教員が小学校の総合の内容について知りたいと考えていることがわかる。

(10)～(16)は、主に学習指導や学力育成のために系統性を必要とするコメントである。(10)～(13)は、小中学校で一貫して総合的学習で育てる資質能力を確認し、系統的にカリキュラムを編成することの必要性を指摘するものである。また、(13)や(14)のコメントに見られるように、「9年間」という記述も目立つ。これは、小学校生活科を想定していると考えられるが、小学校低学年から中学校までを貫く資質能力の育成を想定することの必要性を感じている教員が少なくないことがうかがわれる。(14)は、総合的学習の柱を「キャリア教育」に据えおり、(15)は、総合的学習が育てる資質能力の中でも特に「表現力」といった目に見えやすいスキルに重きを置いている。一方で、(16)のように、コミュニケーションスキルの育成を重要と考えるコメントも見られる。

(17)は、小中学校間の交流を必要とするコメントである。こちらも小学校調査に同様のコメントがあるが、小中学校の児童生徒の交流を通して、双方の総合的学習の取り組みや、児童生徒の実態等を理解することの重要性を指摘するものと考えられることができる。

(18)も、小学校調査で指摘されている地域の優れた人材や教材の共有に関するコメントである。地域の方々にも、総合的学習のねらいや小中学校の児童生徒の実態を理解してもらう必要があることを指摘している。

(19)～(22)は、小中連携・接続の重要性は認識していながらも、そのために時間を割くことの難しさを訴えるコメントである。その中でも(22)は、限られた時間の中で小中連携・接続を促進するための具体的な手立てについて言及している。

(23)は少数意見ではあるものの、中学校において総合的学習での小学校との連携・接続が必ずしも優先事項になっていないことを示唆している。

### 3 調査結果から見えてくること

以上の質問紙調査の結果から、小中学校の総合的学習の担当者の意識や抱えている悩みや不安などが明らかになった。ここでは、この結果を踏まえ、総合的学習の担当者が担当者としての職責を果たせるようにするための具体的な方策を提案したい。

#### (1) 総合的学習の担当者的カリキュラム・マネジメント指導スキルを強化するための研修の充実

今回の調査では、総合的学習の今日的な意義やその成果等を十分に理解していないと思われ

るコメントもいくつか散見された。したがって、総合的学習の担当者であっても総合的学習に関するスキルを有しているとは限らないことがわかる。このような状況は、他教科等とは大きく異なる。他教科等（特に教科教育）では、それぞれの教科等についての専門的な知識を有する教員がその担当者となるケースが多い。特に教科の専門性が高い中学校では、ほとんどの学校において専門的な知識を有する教員がその教科の担当者となっている。小学校においても、教科書の内容や教科書会社などが作成するカリキュラムに従うことで、経験の浅い教員であっても最低限のカリキュラム編成、学習指導ができるようになっており、教科の担当者がその教科についての学校全体のカリキュラム編成を担っていたり、他の教員のカリキュラム・マネジメントについて指導助言をしたりする事例はほとんど聞かれない。一方で、総合的学習においては、カリキュラムを一から創り出すだけでなく、その過程で外部の様々な人材や機関と連携したり、校内の協力体制を築いたりすることが求められる。このようなカリキュラムの計画、実践、評価に関する幅広いスキルが、総合的学習を担当するすべての教員に求められる。こうしたスキルを育成するためには、総合的学習の担当者が十分なカリキュラム・マネジメントに関する指導スキルを身につける必要があり、そのための研修の機会を設けていくことが肝要である。

2014（平成26）年の「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」では、新しい時代にふさわしい学習指導要領等の在り方についての審議事項として、「学習指導要領等の理念を実現するための、各学校におけるカリキュラム・マネジメントや、学習・指導方法及び評価方法の改善を支援する方策」<sup>4)</sup>が挙げられている。カリキュラム・マネジメントに関するスキルは、今後は総合的学習に限らず、あらゆる教科等で求められることが想定されることから、これからの教員にとっての必須のスキルともいえよう。他教科等であっても、学校や地域、児童生徒の実態に応じたカリキュラム・マネジメントは必要である。将来的には、総合的学習の担当者には、学校全体のカリキュラムをマネジメントする「カリキュラム・コーディネーター」としての役割を担うことを期待したい。そのためにも、担当者のカリキュラム・マネジメントの指導スキルの強化は急務である。

## （2）総合的学習の担当者を育成しサポートする学校体制の構築

質問紙調査のコメントからは、総合的学習の担当者に求められるスキルが多様であることがわかる。カリキュラム・マネジメントに関するスキルだけではなく、総合的学習の目的や内容について外部に説明し理解を求めることが重要な職務となっている。また、中学校においては、校内の教員の理解を得ることも求められている。その一方で、必ずしも総合的学習の指導経験の豊富な教員が総合的学習の担当者とはなっていない現状も明らかとなっており、担当者自身の経験不足による負担感の増大という課題も見えている。

総合的学習の担当者は、短い期間で担当者が交替しているのが現状である。多くの学校がこのポジションを重要視していないことが推察される。こうした状況では、担当者が自身のスキルを積み上げることが難しく、担当者としての職務を果たすことが困難である。各学校で総合

的学習の担当者の意義や役割について再考し、中長期的なスパンでその担当者を決定する人事的な配慮が必要となるであろう。加えて、次期の担当者の育成も忘れてはならない。担当者が自身のスキルを高めると同時に、積み上げたスキルを次期の担当者に引き継いでいく学校体制が必要となってくる。

こうした学校体制を構築するためには、各学校の管理職のリーダーシップが欠かせない。この点については、学習指導要領解説（以下、「解説」とする）にも指摘されているところである<sup>5)</sup>。しかし、解説が提案する「校内分担」を見ると、総合的学習の担当者の役割について、この時間の「企画・運営・実施」と示しているにすぎず、その具体的な職務は非常に曖昧である<sup>6)</sup>。また、校内推進委員会の立ち上げについても提案しているが、この組織の責任の所在が不明確であり、学校全体の総合的学習の方向性を協議する委員会としては甚だ心許ない。

総合的学習において、外部と連携しながら、教員の理解を得てカリキュラム・マネジメントを実行していくためには、総合的学習についての高い専門性をもった教員を中心とする校内体制が必要であり、単に役割を分担すればよいというものではない。総合的学習の担当者を校内のカリキュラム・マネジメントを担う重要なポジションとして育成しサポートする学校体制を管理職が責任をもって構築していくことが有効ではないだろうか。

### （3）小中学校の総合的学習の担当者による情報交換

小中学校ともに総合的学習における小中連携・接続について、多くの担当者が必要性を感じている。しかし、必要と感じる理由や切実感には大きな差がある。小学校においては、学習内容の重複を避けるために小中学校間で連携をしていくことに必要性を感じている教員が多い。そして中学校の担当者は、学習内容の重複が生徒の学習意欲の低下につながることを危惧している。そのためにも小学校の総合的学習の取り組みについての情報を欲していることが今回の調査で明らかとなった。筆者は、小中学校間で総合的学習において取り組むテーマや課題に重複があることが必ずしも問題であるとは考えていない。しかし、いわゆる「逆転現象」は、生徒の意欲や学習成果の減退を招き、ひいては中学校の総合的学習の意義そのものが問われることにもなりかねないのではないかと。

小学校の担当者からは、「特別に総合だけ」に小中連携・接続の必要性を感じないとの意見もあるが、むしろ他教科等のように決められたカリキュラムが提示されていない総合的学習だからこそ、小中連携・接続が必要と考える担当者の方が多いと考えられる。このようなニーズを小学校の担当者は認識する必要がある。その上で筆者は、小中学校で連携して総合的学習のカリキュラムを開発することを提案したい。小学校の担当者からは、「学校の独自性を尊重すべき」との声もある。小中連携・接続を促進するにあたって、小学校の総合的学習のカリキュラムの独自性が損なわれることがあってはならないが、小中学校間で総合的学習が育てようとする資質能力を共に考えることには大きな意味がある。担当者のコメントを見ると、中学校の担当者は育てたい資質能力として、発表や発信等の「表現力」、交流の力等の「コミュニケー

ション能力」を想定している。このような資質能力は客観的に測定しやすいものである。しかし、これらは総合的学習が育てる資質能力の一面に過ぎない。総合的学習は21世紀を生き抜く汎用的な能力の育成が期待されているのだが、未だにこうした理念が十分に浸透していないことも大きな課題である。総合的学習にふさわしい育成すべき資質能力を見据えた学校独自のカリキュラム・マネジメントを行っていくことが、これからの時代の総合的学習の担当者に求められる重要な職務になるのではないだろうか。

## おわりに

総合的学習の担当者のコメントから、小中学校の担当者の意識には差異が見られるものの、多くの担当者が総合的学習の取り組みや成果を肯定的に捉えていることがわかる。その一方で、経験不足で担当者としてのスキルに自信がなかったり、時間的な制約の中で苦勞していたりする担当者が大変多いということも明らかとなった。担当者を育てるシステムや学校体制を構築することができれば、各学校の総合的学習のカリキュラム・マネジメントは一層充実したものになるのではないだろうか。

さて、アクティブ・ラーニングが注目される今日において、担当者のコメントの中に総合的学習における学習形態に関する連携・接続についての指摘があったことは大きな意味があると考えている。特に中学校においては、総合的学習の学習形態に関する詳細な実践報告や授業公開が行われにくい<sup>7)</sup>。総合的学習の学び方、学習形態といった方法論についても、目標論、内容論とともに小中学校で連携していくことが、アクティブ・ラーニングの促進に寄与することになるだろう。このような役割を担っていくことも、総合的学習の担当者には期待が寄せられるのではないかと考えている。

- 
- 1) カリキュラム・マネジメントの重要性については、文部科学省教育課程企画特別部会「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」pp.21-23（平成27年8月）において指摘がある。
  - 2) 加藤智（2016）「総合的な学習の時間における小中連携・接続の実態と今後の課題」日本生活科・総合的学習教育学会学会誌『せいかつか&そうごう』第23号（収録予定）
  - 3) 浜松市教育委員会（2015）「平成26年度教育委員会点検・評価報告書」（平成27年3月）、p.11
  - 4) 文部科学大臣「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」2014（平成26）年11月20日
  - 5) 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社、pp.96-100
  - 6) 同上書、p.98

- 7) 近年、中学校における総合的学習に関する研究発表会がほとんど見られなくなっている。そのほか、総合的学習に関する我が国唯一の専門学会である日本生活科・総合的学習教育学会の会員構成を見ると、小学校教員が54.8%であるのに対して中学校教員は2.5%となっており（2015年4月現在、日本生活科・総合的学習教育学会ホームページより）、学会発表においても、2015年度全国大会（福岡大会）の自由研究発表130本中、中学校の総合的学習に関する発表は7本と極めて少ない。

〔付記〕本稿は、JSPS 科研費（15K21574 若手研究（B）「生活科・総合的な学習の時間を担当するコーディネーター設置の可能性に関する研究」）の助成を受けた研究成果の一部である。

本研究にあたって、お忙しいところ質問紙調査にご協力いただいた浜松市の小中学校の先生方に心より御礼申し上げます。